



第4回九州スーパーシニアカップ

競技報告 (2018/ 3/ 28)

写真と記事 : M. Kikutake

3オーバーの75

81歳の藤本隆 (天山)

エージシュートを記録して初優勝



第4回九州スーパーシニアカップは3月28日、福岡県小郡市の小郡カントリー倶楽部(5720㌦、パー72)で行われ、3オーバーの75で回った藤本隆(天山、写真㊦)が初優勝した。藤本は81歳。エージシュートを達成しての優勝だった。(写真㊦は大会に参加した皆さん)

80歳以上(今年12月31日現在)のシニアを対象にした大会で、91人(欠場9人)が出場。高齢化社会を象徴するように年々、参加者が増え、今年は過去最多の100人がエントリーした。あいにく体調が悪いなどで9人が欠場したが、それでも最多出場記録は更新した。

エージシュート続々、14人

この日の天候は晴れ、気温20.9度、西の風2.3㌦(正午現在)と絶好のコンディション。スーパーたちは元気にラウンドしたが、ヤーデージ(距離)が昨年の6005㌦から285㌦短くなったため、昨年は3人だったエージシュート達成者が今年は、14人と大賑わいの大会となった。





(満開の桜の下でのラウンド=「ゴルフタイムス」提供)

そんな中で藤本は前半1バーディー、1ボギーの36と絶好調で折り返すと、後半も3ボギーの39と踏みとどまり、78のスコアで2位の河野信正(久山、83歳)に3打差をつけて快勝した。3位は池田清(佐世保・平戸、80歳)、4位梶原啓三(福岡レイクサイド、80歳)、5位木村一郎(夜須高原、79歳)。2位河野から5位木村まで78の同スコアだったが、大会規定により、年長者上位となった。前回優勝の石橋国彦(福岡国際、80歳)は連覇はならなかったものの、それでもエージシュートの80で回り、10位と健闘。参加最高齢、現在1469回のエージシュート達成記録を持つ94歳の植杉乾蔵(球磨)は病み上がりの体調不十分で、101のスコアで86位に低迷した。

【晴れのエージシューター】

	名前	年齢	スコア
優勝	藤本 隆	81歳	75
2位	河野 信正	83	78
3位	池田 清	80	78
4位	梶原 啓三	80	78
5位	木村 一郎	79	78
6位	堀尾 楨彌	85	79
7位	吉永 慎二	82	79
8位	牧山 忠生	79	79
9位	安藤喜三郎	84	80
10位	石橋 国彦	80	80
11位	萩原 正男	80	80
13位	河室 健士	85	81
15位	稲益 三敏	86	83
16位	池田 正伸	84	83

同スコアは年長上位



2位 河野信正



3位 池田 清



4位 梶原 啓三



5位 木村一郎



「コースとの相性が良かった」

初優勝に破顔の藤本隆

久しぶりのコーライ芝のグリーン。「難しいから(思い切って)打てない。恐るおそるだった」と言う。スタートの1番(パー5)でいきなり下り5を沈めてバーディースタート。6番(パー4)で第一打を左の木に当ててやっとの3オン、2パットのボギー。その後は「手前から、手前から」と安全飛行を続けていたが、「前半がパープレーだから、後半は逆にビビりまくっていた」と言う。しかし、その後半をボギー3つに収めて3オーバー。終わってみれば、「そこそこやれたということですね」と笑顔を見せた。

福岡県志免町の生まれ。高校卒業後は航空自衛隊に入り、整備を担当して全国の基地を回った。ゴルフは32歳の時からだが、本格的になったのは45歳の定年後からだったという。シニア競技を中心に試合に出るようになり、これまでに日本シニアに2回出て、1993年の大会で5位タイの成績。九州グランドシニアは2007年に2位になっている。

結構、凝り性？ 自宅庭には20年ほど前にグリーンを造り、パッティングやアプローチの練習ができるようにしている。試合前には2週間前から整体に力を入れ、コンディションを整える。年間40ラウンドほどをこなす。「負けるのは面白くない」。だから、これまで心掛けてきたのは「努力」という。

「ゴルフは楽しくできればいい」と言うが、目標もある。「グランドシニアで日本選手権に出たい。目標を持たないと気持ちが萎える」。藤本さんはそう言いながら、穏やかな笑顔を見せていた。

1470 回目のエージシュートはならず

○…これまでに1469回のエージシュートを達成している参加最年長、94歳の植杉乾蔵は、前半の49に続き後半は52の計101で今回は残念な結果だった。

昨年夏、墓参りに行ったときに貰い事故で腰を骨折、3カ月ほど入院した。年が明けてリハビリと少しずつラウンドを始め、今回が今年5回目のコース。この日のゴルフは「何もかもが悪かった」。アテストで自分のスコアをしみじみ確認すると、よほど納得がいかなかったのか、「来年も出ないと」といかにも悔しそうにしていた。